震災実話悲しき感謝

市田弋七著

国立国会図書館

特118

13

始

震災實話

悲しき感謝

国立国会
51.8.16
図書館

特118
13

震災實話

悲しき感謝

大正
12.11.3
内交

((一))

津田久雄も罹災者の一人であつた。蓬々と乱れた髪、生色のない其の顔色、身には泥まみれのシャツ一枚を纏ふて居るだけそして肩から右腕に掛けて痛ましいはう帶が卷かれてゐる……ありし日のせうしやとした青年紳士の面影は、今、何處よも見る事が出來あかつた。

彼は銀座街頭に一大威觀を誇つた〇〇商會の主人である。父は其の當時に於ける財界の巨頭であつたが、數年前父の病沒後彼は漸く三十才にして其の巨萬の富を引繼いだのである、けれども彼は新智識を以て自ら誇り、積極主義を以て密かに慢じて居た。即ち然うした時代流の男であつたが、隨つて彼の商畧は事毎に華やかであつて亡父の堅實主義、蓄財主義とは全然反對であつた。……或る時、彼には伯父に當る藤村はこんなことを言つて彼を戒めた。

「お前の其の方針は或は今の世の中には適合して居るかも知れあい、お前の其の積極主義も良い、而し人間には何時如何なる時に變異が巡つて來あいものでもないのだ、其の時になつて狼たへた處で追つ付くものでない、變異に備へる蓄財と云ふ事は人間の考ふべき正しい道である」

而し彼は然うした伯父の訓戒に對して一顧も與へあかつた。

「何が正しい道だ……十万の資本金を以つて百万の金を運轉するのが賢い人間のする事だ、……死んだ親父や伯父さんの考へは最うかびが生えて居る」

斯くして彼は有らゆる方面に手を延ばして、自ら實業界の少壯手腕家を以て任じて居たのであつた。

（二）

恐ろしい惡夢に襲はれて、彼は、眼を醒した。

薄暗い部屋の中には幾つも幾つもベットが並べられて居る。そしてそのベットの上には何れも皆、はう帶をした外傷患者が苦痛の聲を放つてしんきんを續けてゐる。

津田も又、其のベットの上の一人であつた。肩から右の腕に掛けた火傷が烈しい高熱を感ずる。頭の髓が茫としてズン〳〵痛んで來る……けれども此の末曾有の大災厄に人手の足りない急設病院では、之等の患者に對する充分の手當が行届かなかつた。

「あゝ恐ろしい、恐ろしい災害であつた、何も彼も空である、無である」

彼は然う思ふと今更ながら當時の慘狀が瞭々と眼に浮んで來る。それは余りに恐しい阿鼻叫喚の現實である。地軸が割れたかと思はるゝやうな大震災、世界の端までも燒き盡しさうな猛

火、泣く者、叫ぶ者、走る者、轉ぶ者、そして彼の經營してゐた〇〇商會の大立物が恐しい火煙の中に轟然たる音響と共に倒壞してしまつた。

「あの時の凄慘な光景……總べてが一朝の夢と化したのだ、昨の豪者も今は乞食である」

彼は齒を喰ひ締つて眼をつぶつた。涙は其の眼尻から流れた

（三）

津田は更に生死もわかぬ母や妻の身の上に想ひを走せぬ譯には行かなかつた。

「あなた、あなたッ……助けて、助けて……」

血走つた眼を裂けよと見張つて、斯う叫んだ妻の最後の聲が今も猶ほ耳の底に微かに聽えるやうな氣がする。

あゝあの時……

あの時、俺は何故妻の手を離したらう、そして母の手も。イヤ俺は死んでも離さない積りで居た。が、あの人ごみの押されて遂う〳〵離れて仕舞つた。數間の間に妻の狂乱の姿を見付けた刹那、俺は萬難を排しても母や妻を助けやうと引き反した。恰度其の時である、東洋一を以つて誇つた□□ビルディングが猛々たる火煙と共に倒壞した。母や妻はアノ大建築物の下敷となつたらしい、彼女等が斷末間の其の刹那に於いて如何に

此の俺を思ひ續けた事であらう……

美しい眠や恰好のいゝ鼻や小さい口元や……さうした妻の相貌を思ひ浮べやうとしても、どうしたのか慘たらしく慘死したすがたのみが眼に浮ぶ。

「愛しくも可憐なる妻は最う此の世に存在して居ないのか」

此處まで思ひ巡らした時、混乱した彼の頭腦は白痴となるのではないかとさい思はれた。

彼は薄暗い部屋の中に……ベットの上に……一夜悶々として泣き明した。

（（四））

ろれから十數日が經つた。津田久雄の妻女と母との無慘な死骸が□□ビルディングの土壌の下から發掘された。津田の火傷も應急手當でどうにか快方に向つたので、急設病院を退院するに至つたのである。

彼は二女の死骸を目の當りに見て更に涙を新らたにした。そして此の稀有の大災害の中にあつて、出來得るだけの心盡しを以て二女の葬送を濟ます事が出來た。

……之等葬式萬端に要する費用を疑懼する人は止めよ津田は○○省や二三の官廳に納品の請負をもして居たが、之に要する保証金を公債証書を以て納附して居たのであつた。彼は其の下附

を願つたのである。

津田久雄は今は僅か五千圓の公債証書が全財産であり、又次の活動の生命でもあつた、其の内から愛しい妻や母の野邊の送りも濟ませた。

其れから數日後には彼の活動舞臺であるバラック式の家も出來た。寂しい内にも大望を抱さつゝそれに引き移られた事に對して初めて公債の有難味を知つた彼は限りなき感謝の涙を流しつゝ天職に就いたのであつた。

失敗者の哀話

一しほ繁雑な月末の決算も出來た、昇りに昇つて下るを知らざる此の暑中、母一人子一人の私は少しでも母に涼しい思ひをさせたいと、また紅葉の染まる頃に結婚式を擧ぐべき愛子さんとも一所に旅暮しをして見たいと思ふ心から、九月一日朝一番で鎌倉に出立しました、プラットホームまで送つて呉れた支配人に留守中の諸事萬端、殊に近頃出來上つたばかりの須田町の支店の方には別して心を用ふるやうに賴みて驛を靜かに離れました、

東京では煮えるやうな暑さも流石鎌倉では洗はれるやうな涼しさです、兎も角も友人の世話で借りた別莊に落付いた、母や愛子さんも喜ぶので私も滿足して朝食ともつかぬ食事を濟して、女の人達に荷物を解くのを賴み形付くまで私は一人海岸へ出ました、寄せては返し岸打浪に快く濡れた砂にしやがんでつく〳〵自分の身の上を考ふるゝ、十幾代も續いた江戸時代からの身代、先々代の祖父は手違ひしてやゝ手狹になり、父は早死したので家業を讓られた私は一層世間の信用を得て業務を發展させなければならぬと思ふたから古風の店のみではとても我慢されず、昨年も林の叔父や他の人々等は大反對したにも拘らず須田町に無理な算段して建築費のみでも二十万計り資して支店を新築した、營業方針も新式に改め市内の評判もよく

利益も豫想以上上るので實に喜こばしい、此の上は愛子さんと結婚して來年あたりは鎌倉へ別莊の一軒位建て〻毎年來るやうにしやう、どうも借別莊では氣持が惡い、質素〳〵とすみつたれお家憲なんか今頃は流行らあい……などと想ひたどる折しもあれ、スワ地震との叫び聲、自分は我知らず波の中へ投げ込まれた、漸つとの事ではい上り歩かうとしても立つ事が出來ない、はふやうにして小高い丘へ上るとイヤハヤ耳を劈くやうな騒ぎ、家の倒れる音、助けを呼ぶ女共の聲、逃げ惑ふ人々の樣、アッ私も別莊の方へ母と愛さんを殘して來たのだと思ふとブル〳〵と身体が震へ ポッと上氣して氣を失つて倒れて仕舞つ

た、……あゝ夢だ〳〵、世は夢の世だと云ふがそれは他人の事で決して自分の身邊に起る出來事ではないと自信じてゐた、私はまア今の身の上たるや何事だらう、一朝にしてさしも誇つた人形町の河内屋土藏や家屋、金庫まで一掴みの灰と化し、土地や動産を擔保として借金までして新築した須田町の支店は影も形も無い、それのみか〳〵三才の時から母の手一つで育てられた其の恩ある母親が、イヤ、モッタイないが今では母親より大切に想つてゐる愛子さん、愛子さん、アヽ何んと云ふ悲しい事だらう、二人共此の世にはもうないのである、昨日のブルジョアを誇つた私も今日は身に何一つ殘つて居ない、肉身の家族

もあい、恥かしいが二百圓足らずの金を持つて居るのみだ、最後、ア、最後だ、自分の今立つて居る處は何處、悲しい避難所ではあいか、あゝ連日良心にせめられてゐる、貯蓄の事、林の叔父様の御意見、全財産を資金にせずとも公債か又お金の蓄はへでもして居たら今ころは何んとか成るべきものを、實に自分の心掛けが足らなかつた、今の場合多くの公債か蓄金のある人は何等の苦痛も無く再び世に立つ事が出來るのだ、あゝ殘念だ實に殘念だ、（終）

罹災者の實話

「日本の改造、其が天災によつて行はれたんだがあまり悲慘だつた」と言ひながら側のビールをグッと呑みほした、

「君も知つてるだらう、九月一日の帝都の大震災を……口にも何にも言ふ事が出來ないよ」

「ウン、僕も新聞では承知して居たがネー然し何んだ、君達の生死が知れたんで僕も安心したよ」と彼の竹馬の友の沼田が眞實安心した樣ゑ相槌を打つた、

「僕も其の日は用事も別にないので……尤も一日だつたからネー奥に居たんだ、するとガラ〳〵と家がゆれ出したんだ、同時に向ひの八百屋の看板が大きな音を立て〻落ちて來た、こりや

斯うして居られない早く逃げなくつちやと早速、君も知つてるあの帳簞笥から通帳や有價証券を一纏めにして其のまゝ逃げ出した、勿論着たまゝでサ」と暗い顔をしてなほ語り續けた、

「其れから松屋の前まで皆と共に來たんだが此處も火ぜめなんだ、三方から火が來てネ、家内や小供は安全地帶の丸の内に先に逃がしてホッとして居ると錦町の方も盛んに燃えて居る、こうなつちや東洋一の都も悲しいかなどん〳〵燒けてしまふんだ僕の足下で三人四人と死んで居る、僕も生きてゐる氣はしなかつたよ」

「ウン、そうだらう」

「新聞や何かではあんな大きな大悲惨事は全部知る事は不可能たし又とても書きあらはれないんだからネー、逃れ〳〵て四日目に燒けた僕の家に行つたサ、其の時はック〳〵考へたネー、君も知つてるだらう、青柳の家をネー」

「知つてるヨ、それが何如したんだ」

「あれ程立派な家もあの火と地震には耐える事が出來なかつた灰になつて仕舞つて居るんだ、家あんかは立派な家は不用だネ僕は然し不幸中の幸ひだつた、利益金は預金と帝國公債や債券に換へて居たから割にユッタリする事ができたよ」と明るい顔をして大きく笑つた、

「君の日頃の用心のよいのには僕も感心して居るんだ、時に妻君や小供さんは如何したネー」

「それ計りは今じや心配たしさ、四日目に生きてゐる事が知れたんだ、そして早速彼女等三人は小石川の家サ、知つてるたらう、あれの里方に避難さして僕たけがきた譯あんだ」

「ウンさうか、それでは安心だ、ハ　ハ　ハ」

「ハ　ハ　ハ」

「僕も東京が落付き次第又商賣を始めるよ、何に沿津の方が安全だから、安心サ」と語り終つて外の虫の鳴く音に耳を聳ばたてながら「君の故里はまつたくよいネーあんな大きな出來事が

あいからなア」

「安全地帶だらうよ、ハハハハ」

◆　◆　◆

外ではコホロギが淋しげに鳴いて居る、彼は夜具の中で此れからより大きな望を抱きながら夢路をたどつてゐるのだらう、

微かにスエー〳〵と寢息が淋しくもれてくる、

……淡い電燈が二人の安らかな寢りを靜かに守つてゐる、

◆人生道の標語◆

「……享樂の後に苦しみあり、働け〳〵笑つて働け、公債と債券は不幸の寶……」此は彼の座右の友だつた、

震災實話

日頃の心がけ

「オッ母さん明日から授業が始まるんだつて、それでネー今日先生からよつく御注意があつたのヨ」と光子と今年四年生になつた正俊とが始業式から歸つたばかりの通學姿で台所で御飯の仕度をして居る御母様と今日の始業式の話をして居た、

「光ちやんも正ちやんも夏休中は祖父さんにあまつたれてゐたんだから此れからは一生懸命に御勉強をしなくつちや駄目ですヨ」

「ウン僕あんか一生懸命勉強するヨ、ネーオッ母さん、オ父さんが優等だつたら大學にあげると言ふてゐたヨ、だから一生懸命勉強して僕博士になるんだ、ネーオッ母さん」

「ホ……その博士にある樣に御勉強なさいヨ」斯うした思ひやりの深い御母樣を持つた光子と正俊は幸福でした、彼等二人の御父樣も御母樣と同じく二人をほんとうに可愛がつて呉れたのです、そして御父樣の給料の内から月々二人の分の貯金もして呉れました、

光子にも正俊にも貯金が二人で四十圓にあつたら政府で發行してゐる債券と云ふものを買つてやると何時も言ふてゐた、それは今年の一月でした、御父樣は光子と正俊を連て約束通り債券と、父の賞與と日頃貯いた御金を以て公債を買ひに行つたのです、

それから七ケ月は過ぎ光子と正俊の始業式のあつた九月一日その日はほんとうに悲しい日でした、あの大東京も地震と火の爲めにせめたてられて或は死に或は負傷した人が何萬あつたか知れません、さうした中にも光子や正俊の一家は無事に逃げ出しました、然し着たまゝでした、御飯を食たいが喰ふ物がなし水は一滴もないのです、そうした苦しみを味ふてゐる中に日はだん〳〵過ぎました、御父様は光子と正俊により以上の苦しみをさせたくないと言ふ心から買入れた公債を金に換へてバラックの小さな家を建てゝ數日後に皆が引移りました、

或る時、御父様の仲よしの小父さんが來て、

「君債券を持つてゐるさうだが、籤が發表になつたよ」と知らして呉れたので翌日早速行つて見ると如何でせう、五千圓當つて居たのです、

苦しみを味つた光子正俊の一家は日頃の用心がよかつたので一時は苦しい事にあつても決して他の人のやうに悲しまなくつてもよかつたのです、

「光子、公債や債券の有難い事を知つたらう」と御父様も御母様も御夕飯の時に御言ひになりました、

バラックの粗末な窓からは此の幸福な一家の人達に淡い恵の光を投て居ました、

非売品

大正十二年十月八日印刷
大正十二年十月十日發行

青森市新町一〇八、一〇九番合併地
著作兼發行者　市田才七

青森市濱町五十三番地
印刷所　陸奥印刷所

市田債券部
青森市新町一〇八、一〇九合併地
電話九六二番
振替口座仙台一六四二番

◈ 青森縣取扱銀行

弘前市百石町（株）津輕銀行
三戸郡八戸町（同）八戸商業銀行
同　郡五戸町（同）五戸銀行
北　郡板柳町（同）板柳銀行
北　郡五所川原町（同）佐々木銀行
西　郡木造町（同）木造銀行

以上の外各地銀行取扱店を囑托せり

◈ 奥羽六縣支部所在地

仙臺市清水小路一　同市琵琶首町三二
會津若松市愛宕町二　青森縣八戸町
盛岡市仁王小路四七　秋田市鷹匠町
福嶋縣飯坂溫泉場

外全國到る處出張所の設備あり

終